

1920年代中国における近代家族の形成に関する一考察

—知識人家庭における子育ての理想像とリアリティをめぐって—

朱 奕雷

キーワード：1920年代、五四新文化運動、中国、近代家族、知識人、子育て、家庭教育

【要 旨】 五四新文化運動期を経た1920年代の中国では、伝統中国の家族制度を打破することで近代家族を構築することが提起された。五四新文化運動により、儒教主義の下で規定された伝統中国の道德規範が徹底的に批判され、その代わりに、西洋から流入した新思想は進歩的な知識人に積極的に受け入れられた。1920年代には、家庭改良に関する議論が盛んになり、その一環として家庭教育の改良も多く唱えられた。また、女性解放の風潮により、女性に家庭的役割だけではなく、社会的役割も求められるようになった。西洋文化の積極的な受容および女性の二重役割への要請が近代中国家庭における子育ての近代化にどのような影響を与えたのかを明らかにするために、本稿では、1920年代の中国における知識人家庭の子育ての理想像とリアリティを考察することを試みる。

研究結果として、まず、1920年代の近代家族では、女性の育児責任が強調され、近代学校教育を受けた女性による科学的な知識で育児することが極めて強調された。また、父親の育児責任が提起され、伝統中国で存在した「嚴父慈母」の親子関係への批判から、平等な親子関係の構築が唱えられた。そして、西洋文化の積極的な受容が見られた1920年代の知識人は、家庭教育の中で、次世代に中国の古典書を読ませることで民族的アイデンティティを維持させていた。

本稿により、1920年代の中国の近代家族では、五四新文化運動期に高まってきた「民主」、「科学」の思潮と西洋から流入した児童中心主義の思想が知識人家庭の家庭教育に体现したことが確認できる。また、「新」「旧」文化の対立が最も著しかった1920年代の中国において、知識人は伝統中国の文化を批判しながらも子世代に継承させていたことも明らかになる。

はじめに

本稿の目的は、五四新文化運動（以下、新文化運動）を経た1920年代の中国において、新旧文化の対立と融合の中で子育てがどのように近代化してきたのかを考察することである。そのため、新文化運動の影響を受け、家庭改良を積極的に唱えた進歩的な知識人¹に焦点をあて、彼らが理想とする家庭教育像、および彼らの子育てのリアリティを考察することを試みる。

1919年に始まった新文化運動により、民主的精神に基づく個人の自由と人権を尊重することが提唱された。儒教的秩序の下で編成された伝統中国の家族制度²は、民主的精神に背くものと知識層は強く批判し、従来の家族制度を打破することで近代的な家族制度を構築することが議論された。

また、新文化運動に伴い女性解放の風潮が高まり、女子教育や女性の参政権が提唱されるようになった。そのため、清朝末期から中華民国初期に唱導され、女性の家庭的役割を重視した「賢

妻良母」³思想が批判され、女性は独立した個人と見なされることで、女性の経済的独立が強調された。

女性の社会進出が進んだ1920年代の近代家族では、女性に家庭と社会という二重役割への要請により、家庭における子育ての役割分担はいかに変化してきたのであろうか。また、伝統文化と西洋文化の対立が著しかった1920年代の中国において、家庭教育において、「新」文化と「旧」文化がどのようにせめぎあったのであろうか。

そこで、本稿では、1920年代に発行された『婦女雑誌』⁴に掲載された育児や家庭教育に関する論説を中心に分析を行い、知識層が提起した理想的な親像と家庭教育像を考察する。また、当時の主流雑誌や知識層および彼らの子女が書いた回想録、自伝、インタビュー記録に基づきながら1920年代中国の知識人家庭⁵の子育てのリアリティを解明することを試みる。

1. 先行研究

第1節では、1920年代中国で唱えられた近代的家族像、近代家族における女性の二重役割と近代中国で行われた家庭教育の改良という3つの側面から先行研究を検討する。

1920年代の中国で提起された近代的家族像について、江上幸子⁶は、1920年代の中国で唱えられた主流的な近代家族像は「小家庭」であると指摘した。「小家庭」は、恋愛によって結婚する一夫一婦と未婚の子どもから構成されるものである。このような「小家庭」では、貞操観念について、男女平等を求め、女性にも離婚・再婚の自由が認められていた。また、家族成員はみな平等とし、夫婦は育児や養老を共同で負担していた。また、女性は男性の私有物ではなく、妻は夫に依存するのではなく自立すべきであり、経済的自立も必要とされていたという。

江上は「小家庭」では、家庭成員の平等化が重視されることを指摘しているが、白水紀子⁷は、このような「小家庭」の中で、一見、男女平等を達成したかに見えるが、実は女性を私的領域に取り込み、女性にのみ「社会参加も家庭役割も」というダブル・バインド的な選択を迫ることで、近代家族それ自体が性支配を隠蔽するシステムを内在化していると近代家族において女性が二重の役割を負うことを指摘している。

以上の先行研究から、1920年代の中国では、理想的な家庭像は夫婦双方が平等に家庭責任を担うという小家庭制であると見られるが、このような小家庭の中で、女性の経済的自立が強調されることにより、女性にのみ二重役割が求められたと確認できる。しかし、先行研究で多く指摘された二重役割を負う1920年代の女性が、仕事と家庭のバランスを取るために、どのような困難に直面していたのか、そして、いかにそれを解決したのかがまだ言及されていない。

一方、家庭改良に伴い、家庭教育の改良も近代中国で提起された。楊妍⁸は、1910年から1915年の『婦女雑誌』に掲載された家庭教育関連記事を中心に、民国初期の知識層が唱えた理想的な家庭教育像を分析した。民国初期では、日本を経由した欧米のモンテッソーリ教育方法が家庭教育の中で重要な役割を果たし、家庭教育の内容について、「德育」（道徳教育）と「智育」（智能教育）が家庭の中で特に重要視され、「德育」については、儒教思想に基づく子どもの行動支配という点が1910年代後半の中国においても存在していたことを指摘している。また、子どもの養育について、科学的知識に基づく、健康優先の原則や子どもの成長に相応しい生活環境を保障す

ることも論じている。

楊妍の論文では、新文化運動期以前に行われた家庭教育の改良をめぐって研究しているが、その考察は『婦女雑誌』の誌面のみに基づいており、現実にはどうであったのかが、まだ解明されていない。また、新文化運動期を経た1920年代の中国では、封建制度への批判と西洋から流入した児童中心主義の受容により、家庭教育の中でいかに新たな展開が見られたのかについても検討すべきである。

そこで、次節から、新文化運動を経た1920年代中国の時代背景のもとで、当時の知識人が唱えた理想的な親子像、家庭教育像およびその実態を検討することを試みる。理想像の考察については主に民国期の女性向けの代表的な刊行物である『婦女雑誌』を取り扱い、1920年代の『婦女雑誌』で掲載された家庭教育に関わる論説を検証した上で、知識層が理想とする親子像および家庭教育像を明らかにする。また、民国期の代表的な知識人および彼らの子女が書いた回想録、自伝およびインタビュー記録に基づいて、当時の知識人が次世代に与えた家庭教育の実態を論じる。知識人が理想とする家庭教育像と実態の違いによって、家庭教育は、西洋から流入した新文化と伝統中国の儒教主義的な旧文化の間でどのようにせめぎあったのか、そして、両文化がいかに融合して中国の家庭教育の近代化が模索されたのかを明らかにする。

2. 近代家族における理想の母親像

(1) 近代学校教育を受け科学的な知識で育児する母親

1920年代の中国では、女性解放の風潮により、男性知識人にとって、理想的な配偶者は近代学校教育を受けた女性であった。

『婦女雑誌』第9巻第11号は、「配偶者選択號」という特集号を掲載し、「我之理想的配偶」（私の理想的な配偶者）をテーマとして読者からの投稿を募集した。瑟盧「現代青年男女配偶選擇の傾向」⁹（現代の男女青年が配偶者を選択する時の傾向）では、投稿者の背景を以下のように分析した。投稿者は合計155人であり、その中で男性は129人、女性は26人であった。職業別で見ると、学生や学校の教員がその多くを占めていた。また、配偶者に対する学歴の期待について、中等教育程度以上の教育を受けた女性が配偶者として期待されると答えた男性はほぼ半数を占めていた。なぜ配偶者に中等教育以上の学歴を求めるのかについて、特集号に寄稿した楊尚松は以下のように述べている。

（前略）現在、人々は教育の重要性を意識し始めた。ただし、女子教育はさらに大切だと思う！欧米人は家庭教育と学校教育を同じように重要視している。理由として、子どもが家庭で過ごした時間は極めて多く、家庭教育がうまく行われないと、学校教育でいくら補足しても、何の足しにもならないのである。旧式の女性は子どもに対して溺愛するばかりであったので、子どもに適当な「訓育」が行われなかったのである。それはどれほど残念なことか！彼女たち自身は「訓育」とは何かさえ知らないで、適当かどうかとは言えない。そのため、私は、師範卒業生が配偶者になってほしい。女子師範からの卒業生が受けた教育は旧式の女性から教えられたわけではないので、子どもを訓育する方法も適切だと思う。また、そのよ

うな女性は、日常生活上欠かせない手紙の往来や記事を書くこと、家計を管理することにも余裕をもっているのだ¹⁰。

楊の言説から見ると、1920年代の中国では、近代学校教育を受けた女性は家計の管理に有利であると考えられる一方、子どもの教育にも有利であると考えられており、理想的な結婚相手としてみなされていたことが分かる。

楊の女性観は1920年代の中国知識人の中で代表的なものだと思われる¹¹。新文化運動の影響により、伝統中国の儒教主義的な女性観は批判を受け、その代わりに、科学的な知識を持ち、家庭や国家建設のために貢献ができる近代的な女性観が1920年代の知識層の中で現れたのである。そこで、近代学校教育を受けた女性は家庭管理や育児に大きな役割を果たし、近代家族の構築に有利であると知識人から提唱されたと見受けられる。

また、民国期には、上述のように近代学校教育を受けた女性により科学的に育児することが提唱されるようになる。

陳品娟「児童教育：母親の責任」¹²（児童教育：母親の責任）の中では、母親は子どもをいかに科学的に養育するのが適切かという点について具体的に提示されている。まず「衣」については、子どもの体温は成人より高いので、服を厚く着せるのは科学的ではなく、母親は、子どもの体温を考えながら、適当な服を着せるのが一番であるという。また、「食」については、子どもに栄養豊富かつ消化しやすい食べ物を食べさせたほうが良いという。また、「住」については、光が充足なところを選ぶこと、暇なときや週末には、子どもを連れ自然と触れ合うことを推奨すると述べている。

陳の言説から見ると、1920年代の中国では、育児の責任は依然として女性に求められ、子どもの養育について、「科学」ということを知識人は強調したと見られる。科学的な育児法の強調については、1920年代の中国では、西洋で唱えられた育児方法をさらに受容し、近代学校教育を受け科学的に育児ができる女性によって子育てすることが一番理想的である、と知識人は強く提唱した。

(2) 育児の責任を自ら担うべきである母親

1920年代の中国では、女性の家庭的役割について、伝統中国でよく見られた子育てを保母や乳母に任せる育児形態への強い批判から、近代家族では、母親は必ず自ら育児をすることが知識層によって唱えられた。

『婦女雑誌』第12巻第6号には、呂舜祥「母親對於子女應負的三種責任」（母親が負うべき三種の責任）が掲載されている。そこでは、育児は母親の天職と捉えられ、「特別な事情を除き、母親は自ら子どもを養育すること」¹³と述べている。

この文章では、母親の子女に対する責任を①「自ら母乳を与えること」、②「子どもと一緒に寝ること」、③「自分で子どもを介護すること」の3点にまとめている。①については、「哺乳は婦女の天職であり、かつ母親としての義務でもある」という。②については、子どもは使用人と一緒に寝ると、衛生面に悪い影響を与える恐れがあるので、母親は子女と一緒に寝ることで、子

どもを大切を守ることができると唱えた。③については、子どもを保母や使用人に任せると、たとえば使用人の性格や性質が悪い場合、子どもに対して悪い影響を与えると述べている¹⁴。

呂の言説では、1920年代の中国では、近代家族の形成に伴い、子どもを家族の中心として大切に守るべき存在であると考え、それまでのように子どもを他人の手に任せることは子どもの教育に悪い影響を与えるため、母親の手で大切に守るべきであるとの提唱がなされており、当時の知識層の母親観と育児観が伺える。

3. 近代家族における理想の父親像—「厳父」批判を通して

1920年代の中国では、母親の育児責任が強調される一方、一部の知識人の間では父親の育児責任も提起されるようになる。

『婦女雑誌』第11巻第11号では、「我将怎樣做父母親」（私は将来、どのように親となるか）の特集号を掲載し、将来、どのような母親、あるいは父親になりたいのかについて読者からの寄稿を求めた。この特集号では、合計12人の読者からの寄稿を掲載し、うち9人は男性で、残りの3人は女性であった。9人の男性からの投稿を分析してみると、彼らは伝統中国で特徴とされる「厳父」¹⁵を批判しており、これにより子どもと平等に対話できる新たな父親像が提起された。

たとえば吳祖襄「我将怎樣做父母親：和大家談談可能罢」（将来どのような親となるべきか：読者とその可能性について語り合う）の中で、伝統中国の家庭の子どもは父親に対してひたすら従順することを「孝」と見なすことに批判を行い、「厳」は子どもの父親に対する恐怖心を起こさせ、結局、「父と子の間は、太平洋ほど隔てられている！」¹⁶と指摘した。また、伝統中国で特徴とされる「厳父慈母」の親子関係の代わりに、子どもの興味や関心に十分に注意を払い、子どもの能力を発揮させることを勧める。さらに、親は子どもに対して説教ではなく、自分の手本を示して子どもを教育することも強調している。

近代家族を構築する中で、良い父親はどのようなイメージであるのかについて、鄭宗海『『怎樣做父亲？』的一个商榷』（「どのように父親となるか」に関する一つの議論）では、良い父親になるために、「子女から心から愛される」¹⁷ことを唱え、具体的な方法について、積極的な面と消極的な面から提示した。

積極的な方法については、①父親は毎日1時間あるいは半時間、子女の遊びを導くこと、または子女と談話すること、②15歳以降、家の何事であっても子女と相談して決めるべきであること、と述べている。また、消極的な面については、①父親は子女を叱るべきではない、②父親は子どもに怒るべきではないと述べている¹⁸。

以上から、近代家族では、子どもの意見を尊重しながら平等な父子関係を構築することが当時の知識層の間で主張されたのである。先行研究で指摘しているように、新文化運動以前では、進歩的な知識人の中にも伝統的な儒教主義の子ども観が根強く、父母との関係によって規定される子どもの存在が最も一般的である¹⁹。しかし、新文化運動により、伝統的な儒教道徳は徹底的に批判され、子どもを独立した個人とみなすという西洋の近代的な子ども観が知識人から受け入れられたといえよう。

さて、当時のメディアで唱えられた父親像は実際に知識人の家庭では実現できたのだろうか。

景宋（許広平）²⁰「魯迅先生与海嬰」（魯迅先生と海嬰）で、父親である魯迅は息子の海嬰との日常生活を描いた。海嬰が生まれてからの世話について、母親の許広平に加えて、父親である魯迅も子育てに参加していた。赤ん坊である海嬰の世話について、夜12時から2時までは魯迅が担当し、2時から6時までは母親の許広平が世話したと厳密なスケジュールを作った。また、魯迅は子どもに歌を唄って寝かしつけていた様子も描いている。子どもが大きくなると、仕事が忙しい中でも、「毎日、昼食後に必ず海嬰と一緒にいる時間を設けた」²¹と述べる。教育方法について、子どもがわがままでちゃんと話を聞かないときには、叩くこともあったが、それは「彼が死去までに数えるほどしかない。さらに、手元に何枚かの紙を丸めて、軽く叩くくらいであった」²²と述べる。また、繰り返し質問した海嬰に丁寧に答えていた父親としての魯迅の様子も描かれている。

許広平が描いた父子間の日常生活からは、父親である魯迅が、伝統中国に見られる「嚴父」のイメージからは一変し、子育てにも積極的に参加していたことが分かる。また、子どもの興味に従い、優しく教育する父親像を読み取ることができる。

魯迅が息子にこのように教育を行う理由として、許広平は「彼は大家族で生まれ育てられたので、旧教育により子どもである自分が抑圧されていたと強く感じた。そこで、自分の子どもにはそのような教育を絶対に受けさせたくないと考えた。特に旧家庭でしつけられていた礼儀作法は、子どもに気の効かない人間になれと教える。そのため、彼は絶対に海嬰にそのようにさせたくない。その代わりに、『敢然として言う、敢然として笑う、敢然として叱る、敢然として戦う』のような人間に育ててほしいという魯迅の教育方針があった²³」と述べる。

以上から、近代家族の構築により、父親は母親と同じように子育てする責任を担うべきであるという考え方が一部の知識層の中に存在していたことが分かる。また、近代家族の父親は、旧中国でイメージされた「嚴父」への批判により、子どもと平等な関係性の構築に力を入れていた。1920年代に新しい家庭を構築した知識層のほとんどは、伝統的な旧家族で生まれ育てられたため、新文化運動で高まった民主、自由の風潮から影響を受けた上、旧家族の慣習を強く批判することにより、子どもと新たな関係性を形成し新たな家庭モデルを構築することを模索し始めたのである。

4. 1920年代中国における知識人による家庭教育の改良

1920年代の中国では、近代家族の形成に伴い、家庭教育をいかに改良するのが課題であった。新文化運動を経た中国では、西洋から流入した児童中心主義の思想が近代家族に導入され、子どもの興味や関心に基づく適切な教育を行うことが知識層の中から提起されるようになった。また、新文化運動期に盛んになった女性解放の運動により、性関係や性道徳が公に議論され、それは次世代への家庭教育にも影響を与え、家庭内において、子どもに性教育を行うべきであると進歩的な知識人に提唱されるようになった。さらに、1920年代に入り、子どもの進学率の向上に伴い、子どもの教育を受ける機会を確保するために、家庭内において子どもの教育費を蓄えることも提案された。

そこで、以下では、①家庭教育における「児童化」の提起、②家庭における子どもに対する性

教育の提起、③子どもの教育を受ける機会の確保という三つの側面から、1920年代の中国における知識人による家庭教育の改良を考察する。

(1) 家庭教育における「児童化」の提起

児童中心主義の受容により、1920年代の中国では、家庭教育の中心は「児童化」である、と知識層は唱えた。たとえば東岑は「論家庭教育的改革」²⁴（家庭教育の改革を論ずる）の中で、伝統中国の家庭教育は、「大人中心主義に偏重すること」、「消極的な懲罰ばかりで、積極的な訓育を行わなかったこと」、「子どもの活動を抑圧すること」、「子どもの環境を軽視すること」であると指摘し、従来の教育は子どもの発展を抑圧し、子どもが健全に発展することができなかつたと指摘した。そこで、従来の教育方法に代わり、「新しい家庭教育」を行うべきであると唱えたのである。この新しい家庭教育という考えを、東岑は「児童化」という言葉で表現した。児童化とは、「子どもを主体として、彼らの生まれながらの個性や必要性に従い、その興味を引き出すようにすること」²⁵である。

東岑が唱えた児童化は、当時、欧米から流入した児童中心主義を家庭内に受容させることを意味していた。子どもをいかに児童化するかについて、当時の知識層は具体的な家庭教育の方法を提示した。陳品娟「児童教育：母親の責任」（児童教育：母親の責任）の中では、子どもを教育する方法を①「暗示」、②「誘導」、③「遊戯」、④「訓誨」という4つの方法にまとめている。①は、子どもは生まれながら模倣するため、母親は自分の言動に十分に注意し、子どもに手本を示すべきだという意味である。また、②は、子どもの興味や関心に基づき、子どもの才能を発揮させることである。③については、子どもの遊びに十分に関心を持ち、遊びを干渉するのではなく、母親は見守り役に徹するべきであると強調している。④については、子どもを叱ること、体罰することではなく、柔くてしっかりとした子どもを訓育するべきであるという²⁶。

陳が唱えた家庭教育の方法には、子どもの個性を尊重しながら彼らの興味や関心に基づく教育を行うべきとする子ども本位の考え方を読み取れる。近代家族の形成により、子どもが発見され、それに伴い、子どもの生まれながらの個性に従い教育することという子ども観の近代化は知識人家庭に受容されるようになってきたと見なすことができる。

(2) 家庭における子どもに対する性教育の提起

1920年代に高まってきた女性解放の風潮の影響により、女性にも恋愛や婚姻の自由が提起され、それに伴い、男女の交際はオープンに語られるようになる²⁷。そのような社会風潮を受けて、家庭教育の中でも、親は子どもの交際を適宜指導すべきであると提起された。

『婦女雑誌』第13巻第1号「小家庭の主婦」（小家庭の主婦）特集号の中で、洪競芳「小家庭の主婦：我的意見如此」（小家庭の主婦：私の意見）は、主婦は成年となった子女に対し、「正しい交際の仕方を教え、性知識を教えることが必要である。異性との適切な付き合い方を教えることが必要である。母親は子どもの結婚相手の徳、智、体を明らかにすることが必要であり、配偶者として適当であるかどうかを判断すべきである。子どもがよい家庭を築くことができるまで、母親としての責任は終わらない」²⁸と主張した。

洪が唱えたように、親が子どもに性教育を行うことや子どもの交際も指導を行うことといった家庭教育の内容は1920年代のメディアでよく見られる²⁹。その背景には、江上が指摘したように、女性解放の思潮が盛んになってきた1920年代の中国では、「性」と「愛」がオープンに議論される中、「性」を是正することが求められ、淫乱や禁欲の弊害を防止するために性教育を行うことが提起された³⁰。また、このような動向は家庭教育にも影響を与え、性教育や子女の社交に関する指導も家庭教育の一環として取り入れることが提唱されたためであると推察される。

(3) 子どもの教育を受ける機会の確保：家計の一環として子どもの教育費を蓄える

新文化運動の影響により、社会の中で、児童教育への関心が一層高まってきたと見られる。家庭の中にも、親の責任として子どもに教育を受けさせる機会を確保することが当時の知識層から提起された。中流階層の家庭にとって、家運が衰退したときや思いがけない災難に遭ったときには、子どもに継続的に教育を受けさせることが困難であるため、子どもが生まれた後、家計の一環として子どもの教育費を蓄えることが提起され始めた。

慧静「児童教育的儲金」（児童教育の貯金）では、子どもの教育費を確保するために、日常生活費から子どもの教育費を貯金することが提起された。また、教育費を蓄える方法についても以下のように具体的に提示している。

私たちは子どもが一歳の時から、積立預金で子どもの教育費を蓄え始めるべきである。月ごとに3元ずつ銀行の口座に入れ、約14年間で元金と利子を加え、合計千元以上になる。その時、子どもも14歳になり、小学校教育がすでに修了し、中学校に進学する時期になる。そうすれば、千元の元金と利子を五、六年に分けて引き出しても足りるだろう³¹。

また、同先「我将怎樣做父母親：根據家庭和社會所得的經驗」（私は将来、どのように親となるか：家庭と社会から得られた経験に基づいて）でも以下のように述べている。

教育費の確保は子どもにとって、最も重要なことである。母親は子どもが生まれてから、豊かな家か貧しい家かにかかわらず、日常生活費を節約し、その一部を蓄えるべきである。もし家運が衰退した場合、子どもを学校に通わせない場合でも、貯金を教育費として使うことができる。そこで、家はどんな災難に遭っても子どもが退学せざるを得ないという状況には至らないのである³²。

1920年代の中国では、子どもの学校への進学率の向上により、子どもに中等以上の教育を受けさせることを必須とする考え方が知識層の中で提起された。その理由については、清末から民国初期にかけて、近代の教育家の提唱および政府の教育経費の投入により、初等教育がある程度整備され、中流階層の親の子どもへの教育期待は、初等教育に留まらず、より高いレベルの教育を受けさせることを望んだのではないかと推察される³³。

子どもへの教育期待の高まりに伴い、子どもに継続的な教育を受けさせることが重要視される

ようになってきた。そのため、家計の一環として教育費を蓄える方法が提起された。実際は、労働者階層の子どもに教育を受けさせることは依然として難しいとされたが、この時期で特徴とされるのは、社会の教育関心は上流階層の子どもだけではなく、中流階層や普通の子どもの家庭の子どもにも教育を受けさせるように働きかけた点である。

5. 近代中国の知識人家庭における子育てのリアリティ

これまでの節では、民国期の代表的な刊行物に基づいて、新文化運動以降の1920年代に、西洋から流入した新文化の受容により、家庭教育の改良を模索した進歩的な知識人の理想とする親像と家庭教育像が何かを論じてきた。そして1920年代以前と比べ、子育ての内容について、児童中心主義に基づき子どもの個性を尊重し、科学的に育児することが極めて強調されたことを検証した。また、儒教主義的な子ども観を批判しながら、親子関係の平等化、子どもを独立した個人とみなすという近代的な親子関係や子ども観が提唱されるようになったのである。

では、知識人が唱えた理想の親子像や家庭教育像は、現実には実現できただろうか。中国型近代家族の形成において、当時の知識人は、西洋から流入した新文化と伝統中国の旧文化をいかに融合させながら家庭教育の改良を模索してきたのだろうか。以下では、近代の知識人家庭における子育ての実態をめぐる、具体的に考察する。

(1) 有職女性である母親のリアリティ

第2節で検証したように、新文化運動以降の中国では、女性の社会進出が一層進んだ一方、家庭内での役割が依然として重要視されていた。女性の家庭的役割としては、使用人や乳母を使わず、育児の責任を自ら担うべきであることや科学的な知識で育児を行うことが唱えられた。

しかし、このような母親像は、現実には実現不可能に近いとも言えよう。新文化運動を経験した知識人女性は、女性解放運動のリーダーと見られ、家庭のために仕事を辞めることを強く拒否し、その結果、より経済的に豊かな家庭では、使用人を使うことで家事と一部の育児責任を任せることがほとんどであった。たとえば、新文化運動期に活躍していた知識人である任鴻雋、陳衡哲夫婦の長女である任以都のインタビュー記録では、彼女が小さい頃の家における使用人の雇用について、以下のように述べている。

(前略) 日中戦争の前、家では4、5人の使用人を雇った。私はよく彼らに言いつけて仕事をさせた。放課後、家に戻ってから、自分がやるべきこと、例えばカバンを部屋に置きに行くことや電灯をつけることなど、私自身の力でできることでも使用人にやらせた。気に入らない場合、彼らを殴る場合さえある。ある日、それを母に見られ、非常に怒らせてしまった。母は私を叱って、学校にも行かせなかった。私に一日中家事をやらせて服を洗わせた。使用人の苦勞を体験させるためである³⁴。

任以都が述べたように、家事を分担するために、使用人を雇うことが当時の知識人家庭でよく見られる。卞趙如蘭は自伝の中で、使用人から歌を学んだと述べる³⁵。また、許広平も「魯迅先

生和海嬰」(魯迅先生と海嬰)の中で、子どもが生まれてから使用人を雇い、彼らが家事や子どもの面倒を助けてくれると述べている³⁶。

これらを踏まえれば、1920年代の中国では、知識人女性は仕事と家庭の両立を実現するために、メディアが唱えるように「他人の手を借りることなく自力で育児や家事を行う」³⁷ことの実践は極めて困難であった。使用人を雇うことで家事や一部の育児責任を分担していたことが中国近代家族のリアリティであるといえる。

しかしながら、民国期では、その以前の時期と比べ、使用人の役割は主に家事の補助と子どもの日常生活の補助である。伝統中国家族でよく見られた子どもを使用人に任せて育てることで、使用人の役割が子どもの養育にまで及ぶことと比べ、民国時代には、しつけや子どもの教育責任は親が担うことが知識層の中で受容された。

(2) 伝統文化の断絶と継承の中を模索していた知識層

新文化運動期に活躍していた知識人の家庭では、西洋から流入した新思想を積極的に受容する一方、伝統文化をいかに扱うのが家庭教育の中で大切な課題として捉えられていた。当時の知識人の回想録やインタビュー記録の分析から、「新」「旧」文化に直面した新文化運動期の知識層は、次世代への教育を行うときに、旧文化との断絶と継承の間で、独自の模索を行ったと考えられる。

伝統文化の断絶について、任以都のインタビュー記録によると、彼女の両親は当時の民衆が楽しんでいた麻雀や京劇を時代遅れのものとみなし、家では京劇や麻雀を絶対にしなかったと述べた³⁸。また、卞趙茹蘭は自伝の中にも子ども時代は京劇を聞く機会があまりなかったと言及している³⁹。

知識人家庭での京劇の拒否は、新文化運動期で広げられた「戯劇改良論争」⁴⁰から伺える。一部の知識人は、京劇を時代遅れのものと考え、中国近代化の阻害の要因の一つとして強く批判した。また、麻雀への批判について、たとえば新文化運動期の代表的な知識人である胡適は『麻将』(麻雀)で、麻雀をアヘン、八股、纏足に次ぐ中国4つ目の害だと指摘し、麻雀をすることは時間の無駄とされ、「世界中を周り、進歩した民族、文明的な国はこのような無駄なことをしているだろうか」⁴¹と麻雀が中国の民衆を享楽主義に陥れてしまい、国の進歩に阻害があると批判した。

しかしながら、麻雀や京劇といった伝統文化へ強く拒否を示した知識層は、家庭教育において、子どもに中国の古典書を読ませることで民族アイデンティティを維持させていたという伝統文化の扱い方に対する矛盾した観点も伺える。たとえば任以都はインタビュー記録の中で以下のように述べる。

父は生涯に渡って科学教育を提唱し、民国以来の「読経」運動を強く批判した。しかし、家では、「四書五経」⁴²を私たちに読ませていた。彼は「中国人であるので、『四書五経』を読まない、本当の中国人とは言えない！」と私たちに言った。(中略)彼は「読経」課程が学校教育に入るのには公に批判した一方、家では自分の子どもたちに「四書五経」を読ませ

て、中国人として必ず読むべき古典書であると私たちに教えてくれた⁴³。

任が述べたように、新文化運動期の知識人において、次世代に中国の古典書を読ませ中国文化を学習させることは稀ではなかった。林語堂「課兒小記」（子どもを教育する記録）の中でも、子どもに中国の古典書を読ませることについて述べている。

私は時代遅れなものだ！彼女たちに（筆者注：子ども）に「五種遺規」⁴⁴を読ませることだ。その中では、例えば程畏斎『読書分年日程』、白居易『燕詩示劉叟』、陸放翁『過林鳥中食柑子有感』、朱子『治家格言』、呂新吾『好人歌』は分かりやすく、読むと親切になると感じている。人としての道理も読むと分かる。さらに、『教女遺規』も教えた。（後略）⁴⁵

京劇や麻雀といった伝統文化の拒否と古典書の受容は、知識人の中では、大衆娯楽である京劇や麻雀をサブカルチャーと見なし、国の進歩に阻害があると考えていた。それに対して、旧文化で生まれ育てられ、古典書を読みながら中国人としてのアイデンティティが形成された彼らにとって、中国の古典書を読むことは、西洋文化に対する全般的な受容の中で、中国人のアイデンティティを維持させるための方法でもあった。そこで、家庭教育の領域には、伝統中国の大衆娯楽に拒否を示す一方で、子どもに古典書を読ませることで中国人としてのアイデンティティを維持させるといった伝統文化の断絶と継承の二つの面が伺える。このような家庭教育の中で、伝統文化を批判しながら次世代へ継承させることは、「新」と「旧」の両文化に直面していた1920年代の知識層が行った独自の模索ともいえよう。

終わりに

1920年代の中国では、「民主」、「科学」を唱えた新文化運動の影響と、中国型近代家族の形成により、家庭教育の内容に新たな展開が見られた。

まず、新文化運動期に唱えられた男女平等と女性解放の思潮により、1920年代の中国では、女性の社会進出が一層進んできた。しかし、女性の社会的役割が強調されただけでなく、家庭における役割も依然として強調されていたことが既存の研究から伺える。近代家族の中で、理想的な母親は、近代学校教育を受け、科学的に育児を行っていた。また、近代の家庭の女性は家事や子育てを自ら担うべきであると当時の知識層は主張した。しかし、現実的には、有職女性が他人の手を借りることなく、仕事と家庭の二つの責任を自ら担うことは極めて困難であったため、より経済的に豊かな家庭では、使用人を雇うことで家事や子どもの日常生活の世話を分担することが一般的であった。使用人の雇用について、1920年代の近代家族に見られる特徴は、使用人の仕事範囲が家事の分担や子どもの日常生活の世話まで関わる人が多いことである。つまり、伝統中国では子どもが使用人の手で育てられることがしばしば見られたが、近代家族では、子どものしつけや教育の責任は母親、あるいは夫婦双方が担っていたという点である。

また、1920年代の中国で唱えられた父親像は「嚴父」への批判から始まったといえる。伝統中国で特徴とされた「嚴父」という父親像は、子どもに体罰することで子どもの恐怖心を起こし、

子どもとの間に大きな距離感を生じさせた。そのため、子どもが抑圧され、心身ともに健全に発達できなかつたと当時の世論で指摘された。そこで、1920年代の父親は子どもとの触れ合う時間を増やし、体罰ではなく、手本を示して子どもの興味や関心に基づく教育を行うことが提唱された。このような新たな父親像が提起されたのは、近代家族で子どもが独立した個人としてみなされるとともに、親子関係の平等化が提起されたためであると考えられる。

1920年代の中国では、近代家族の構築により、親像や親子関係の近代化が見られたほか、家庭教育にも新たな変容が見られた。まず、西洋から流入した児童中心主義の思潮は家庭教育に影響を与え、家庭の中で、子どもの興味や関心に基づき自然に育てるといった「児童化」の教育観が提起された。また、男女の社交がオープンに議論された1920年代は、「性」の是正により性教育の必要性が訴えられる中、家庭教育においても、親は子どもに適切な交際や性教育に関する知識を教えるべきであるとの提唱がなされたのであった。さらに、清末からの初等教育の整備に伴い、家庭の中で、子どもの学歴への期待が一層高まってきた。子どもに中等以上の教育を受けさせるために、子どもの誕生以後に教育費を蓄えることが家計の一環として勧められた。

1920年代では、西洋文化を積極的に受け入れる中で、「旧」文化をいかに批判しながら継承していくのが知識層の直面した課題であった。知識人の家庭では、伝統演劇である京劇や大衆娯楽である麻雀を排除する一方、子どもに中国の古典書を読ませることで民族のアイデンティティを維持させようとしていた様子が多くの知識人家庭で見られる。このような模索は「新」「旧」文化に直面した知識層が次世代への教育の中で行った独自の創造であるといえるだろう。

本稿は新文化運動期を経た1920年代の中国において、「科学」、「民主」および女性解放の風潮により、近代家族における子育てにはどのような新たな展開が見られるか考察を行った。しかし、本稿での検討は知識人家庭に限られているので、当時の世論で高まってきた家庭改造の議論が一般民衆にいかに影響を与えたのかはまだ解明されていない。また、「女は家に帰れ（婦女回家）」論争が強まってきた1930年代において、女性の家庭的役割が再び強調され、家庭における夫婦間の役割分担や子育てにはいかなる新たな展開が見られるのかという点について引き続き検討する必要がある。

注

- 1 本稿で言及する「進歩的な知識人」や「知識人」は、五四新文化運動の影響を受け、西洋から流入した新文化を積極的に受け入れた1920年代の知識人を指している。彼らのほとんどは、欧米での留学経験があり、欧米で唱えられた「民主」、「科学」の新文化により儒教主義的な伝統中国社会を改革しようと主張した。また、本稿で検討する「知識層」も、このような西洋からの新文化を積極的に受け入れた知識人階層を指している。
- 2 伝統中国家族では、一夫多妻制で、家庭内の権力関係は、儒教主義の原則に従った。家庭内では、子は父に従い、妻は夫に従い、年長者を尊ぶ、尊卑の序によって秩序づけられる。
- 3 「賢妻良母」思想は、清末から民国初期にかけて提起された近代的女性像である。女性は家庭にあって、子どもに対しては単なる生活上の躾をするだけでなく、近代国家建設の担い手となる子を産み育て教育する賢母となり、近代社会で活躍する夫を支える近代的教養を備えた良妻となることが求められることである。白水紀子、「中国における『近代家族』の形成—女性の国民化と二重

- 役割の歴史—』『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ人文科学』2004(02), 135-136頁。
- 4 『婦女雜誌』(1915年～1931年)は民国期に最大の影響力を持った女性雑誌である。また、『婦女雜誌』の創刊は新文化運動期であり、当時女性の解放を提唱していた『新潮』、『新青年』などの雑誌と比べると、比較的保守的な位置に当たり、「良妻賢母」の観念を重視していた。しかし1921年に入ると、女性解放あるいは家庭革新などの問題が重視されるようになってきた。遊鍵明著(大澤肇訳)『『婦女雜誌』から近代家政知識の構築を見る—食・衣・住を例として』、『『婦女雜誌』からみる近代中国女性』, 村田雄二郎, 研文出版, 2005年, 74頁。
 - 5 本稿で考察する知識人家庭は、西洋からの新思想を積極的に受容した進歩的な知識人が構築した家庭を指している。近代中国では、社会改良の一環として家庭改良が行われるべきであると知識人の中で多く議論され、一夫一婦とその未婚の子どもから構成される核家族がその典型的な家庭像である。そこで、本稿で議論する知識人家庭は、家族構成からみると核家族であり、子育ての責任は両親が担うという西洋の近代家族に近い家庭を指している。
 - 6 江上幸子「近代中国の家族および愛・性をめぐる議論」『中国ジェンダー史研究入門』小浜正子(ほか)編, 京都大学学術出版会, 2018年, 283頁。
 - 7 前掲 白水紀子「中国における『近代家族』の形成—女性の国民化と二重役割の歴史—」, 135頁。
 - 8 楊妍「近代中国における新国民育成の一考察—『婦女雜誌』初期の家庭教育関連記事を中心に(1915年～1920年)」『国際文化研究(オンライン版)』東北大学大学院国際文化研究科2021(27), 47-62頁。
 - 9 悉慮「現代青年男女配偶選擇の傾向」『婦女雜誌』第9巻第11号(1923年12月), 43-54頁。
 - 10 楊尚松「我之理想的配偶」『婦女雜誌』第9巻第11号(1923年12月), 60頁。
 - 11 何(2004)によると、「五四運動」以降の中国では、近代学校教育の経験を有し、学歴を持つ女性を「新婦女」と呼ばれ、1920年代中国の男性知識人による唱えた理想的な女性像である。何玮, 「1920年代中国社会における「新婦女」—『婦女雜誌』を主なテキストとして」『ジェンダー研究』, 2004(7), 53-72頁。
 - 12 陳品娟「児童教育：母親の責任」『婦女雜誌』第13巻第1号(1927年1月), 44頁。
 - 13 呂舜祥「母親對於子女應負の三種責任」『婦女雜誌』第12巻第6号(1926年6月), 13頁。
 - 14 同上, 14頁。
 - 15 伝統中国の親子関係は、「嚴父慈母」と特徴され、子どもに厳しくしつけする父親と優しくしつけする母親をイメージしていた。また、父親の教育方法も体罰を行うことが多くみられる。その一方、「慈母」は子どもを溺愛することが多く見られる。
 - 16 吳祖襄「我将怎樣做父母親：和大家談談可能罷」『婦女雜誌』第11巻第11号(1925年11月), 1722頁。
 - 17 鄭宗海「『怎樣做父亲?』的一个商榷」『新教育』第5巻第1-2号(1922年8月), 127頁。
 - 18 同上, 128頁。
 - 19 たとえば、蔡元培が執筆した中学校の修身科用テキストである『中学修身教科書』において、新文化運動以前の思想内容を見ると、「子女の道は『孝』、父母の道は『慈』」などといった儒教主義的な家族観、子ども観が見られるという。湯山トミ子, 「近代中国における子ども観の社会史的考察(2) 近代的孩子観の提起—児童中心主義と人類主義、『個』の創出—」『成蹊法学』(82), 2015年, 353-398頁
 - 20 景宋(許広平)は、中国の文学者魯迅の夫人であり、婦女活動家である。景宋は筆名である。1923年北京女子師範大学に入学し、在学中、学生運動に参加した。その後、1928年から教員であった魯迅との同居生活に入った。1936年、魯迅が死去した後、その著作の整理に努めた。また、魯迅との共同生活を描いた文章も多くある。

- 21 景宋「魯迅先生と海嬰」『魯迅風』第18号（1939年），3頁。
- 22 同上，4頁。
- 23 同上。
- 24 東岑「論家庭教育的改革」『婦女雜誌』第14巻第12号（1928年12月），2-6頁を参照。
- 25 同上，3頁。
- 26 前掲 陳品娟「兒童教育：母親的責任」，45頁。
- 27 周敘琪『一九一〇～一九二〇年代都会新婦女生活風貌—以《婦女雜誌》為分析案例』，国立台湾大学文史叢刊（100）台北：台湾大学出版委員会，1993年，176頁。
- 28 洪競芳「小家庭の主婦：我的意見如此」『婦女雜誌』第13巻第1号（1927年1月），73頁。
- 29 たとえば『婦女雜誌』第11巻第11号（1925年11月）の特集号である「我將怎樣做父母親」（私は将来、どのように親となるか）で、劉孝伯「門外漢の一點意見」（素人からの意見）と呉祖襄「理想上應有的條件」（理想とする条件）の中にも子どもに性教育を行うことや子どもの社交にも指導を行うことが述べられた。
- 30 前掲 江上幸子「近代中国の家族および愛・性をめぐる議論」，285頁。
- 31 慧靜「兒童教育的儲金」『家庭』第5号（1922年5月），1-2頁。
- 32 同先「我將怎樣做父母親：根據家庭和社會所得的經驗」『婦女雜誌』第11巻第11号（1925年11月），1725頁。
- 33 蘇雲峰『中国新教育的萌芽与成长：1860～1928』，北京大学出版社，2007年，156-197頁を参照。蘇によると、清末には、中央政府および地方政府の50%の教育経費は初等教育にかかる。初等教育の学校数および学生数も各段階の学校全体および学生数全体の90%に占めた。民国期に入ると、清末に築いた初等教育の基礎に基づき、学校数と初等教育の入学人数にはさらに増加してきたと見られる。しかし、民国時代までに、中国全土では、地域によってかなり教育の水準が違ったので、本研究で検討の対象とするのは中流階層の子どもの教育を受けた状況に限定する。
- 34 張朋園，楊翠華，沈松橋，潘光哲，1993年，『任以都先生訪問記録』中央研究院近代史研究所，97頁。
- 35 卞趙如蘭，陳毓賢，榮鴻曾訊，2016年，「素描式的自伝」『在你温存的笑容中蕩漾：紀念哈佛大學首位華裔女教授趙如蘭』上海音樂學院出版社，13頁。
- 36 前掲 景宋「魯迅先生と海嬰」，4頁。
- 37 前掲 呂舜祥「母親對於子女應負的三種責任」，13頁。
- 38 前掲『任以都先生訪問記録』，100頁。
- 39 前掲「素描式的自伝」，32頁。
- 40 1918年10月に発行された『新青年』第5巻第4号は『戲劇改良專号』であり、新文化運動期の代表的な知識人は、伝統演劇としての京劇を猛烈に批判し、西洋近代劇を基準として伝統演劇を改良しようと議論していた。
- 41 胡適「漫遊的感想（三）」『現代評論』第6巻第145号（1927年8月），15頁。
- 42 「四書五経」は、儒教の経書の中で特に重要される四書と五経の総称である。「四書」とは『論語』、『大学』、『中庸』と『孟子』の4つの書物である。「五経」とは『易経』、『詩経』、『書経』、『礼記』と『春秋』の5つを指す。
- 43 前掲『任以都先生訪問記録』，98頁。
- 44 清朝で社会教育と兒童啓蒙のために編纂された教材である。
- 45 林語堂「課兒小記」『宇宙風』第31期（1936年12月），346頁。